

中江藤樹・心のセミナーから

吉田公平先生の講演内容（前編）

『今、藤樹先生の教えをどう活かすか』

今日、海東さんにおいていただいたのは、僕の強い希望でした。実は二〇〇八年の藤樹先生生誕四百年記念大会の前後に、その当時、高島市の市長さんは海東さんでした。その時、小生の藤樹先生研究の現状を述べました。福島県の会津・喜多方には中江藤樹さんを大好きな人達がたくさんおられました。藤樹先生が亡くなったのちに藤樹先生の学びをどのように受け継ぐかを課題にしたグループがたくさんありました。熊本・大阪・京都・伊勢、後は江戸です。



それから会津・喜多方です。全国的にみんながお互いに切磋琢磨し、資料を交換しながら学んでいました。明治の初めまで続きます。その資料を丁寧（ていねい）に吟味して残していたのが、会津・喜多方の人達なのです。そのことに最初に気がついたのは東洋大学に勤めておられた東敬治さんです。お父さんは東澤瀉（ひがたくしや）です。岩国出身の陽明学者です。その息子さんである東敬治さんは学歴無しで東洋大学の教授になれたのです。あの当時は学歴無しでも大学の教授になれたのです。その一例が幸田露伴（こうたろうへん）です。京都帝国大学の中国文学の先生になりました。露伴さんは「こんなつまらん仕事はやってられない」と一年で辞めてしまいます。内藤湖南（ないとうこなん）さんは大阪朝日新聞の記者をしていました。彼を京都帝国大学の教授に推薦したのは創立委員の狩野亨吉（かのうこうきち）さんです。秋田県出身です。物凄く変わった人です。文部省の役人を怒鳴りつけて抗議しました。しかし、妥協して講師という身分で人事を認めさせ、のちに教授に昇任させました。東洋大学は私立大学ですから、むずかしいことは云われない。学歴無しで大学の先生になった人は何人もいます。その代表者が東敬治さんなのです。東敬治さんが会津・喜多方の人とであり、そこに藤樹さんの後

継者たちが、藤樹思想をどのように展開したのか、という基本資料がまとめて残っていることを知りました。そこで東敬治さんは直接に会津・喜多方に出かけて行って、自分で筆写したのです。それが東洋大学に残っています。小生は広島大学を辞めて東洋大学に赴任した際に、早速その基礎資料を確認しました。

中江藤樹研究では大変大きな役割を果たした人が二人おられます。西普一郎（せいいつちろう）先生と木村光徳（きむらみつとく）先生です。小生は広島大学に在職中は木村光徳先生にしばしば教えを請いました。また西普一郎先生は広島高等師範学校の教授でしたから、その教え子の先生達に西先生の事を教えていただきました。

木村光徳先生は会津・喜多方に出向いて中江藤樹さんのお弟子さん達の資料を自分で写されました。奥様もよくお手伝いされたとの事です。その資料集を出版されました。

小生が東洋大学に赴任した折、鐘紡（かね紡）を退職した小山國三（こやまくにぞう）さんが東洋大学の科目等履修生としておられ、一緒に学ぶことになりました。小山國三さんは会津出身の方ですので、「あなたの郷里にはこういう文化資源が眠っているのですよ。木村光徳先生も紹介していますけれども、資料的には大変問題があるのです」と述べ

て、小山國三さんに「資料整理をお手伝いしていただけませんか」とお願いしました。小山さんはじっくりとお考えになり、「やります」と決意されました。読み上げるのに五年かかりました。小山さんが下読みしたものを小生が確認する作業が延々と続きました。次は出版です。出版はなじみの研文出版。しかし、この種（しゅ）のものは売れません。困り果てていた時に、中江藤樹生誕四百年祭の時に、当時の高島市市長さんであった海東さんにお話ししたら、即座に出版費用の半分を引き受けてくれました。「市議会は大丈夫ですか」と心配したほどです。大洲市の市長さんも「高島が出すならば同額を出します」と承知していただき、出版することができたのです。高島市長さん海東市長さんの決断に敬服して感謝しております。

中江藤樹さんが非常に大きな影響を受けたのは王陽明（おうやうめい）です。しかし、哲学的にはそのお弟子さんの王龍溪（おうりゅうけい）です。王龍溪の語録を若い人と読みこんで、それを出版する段取りになり、科学研究費の出版助成を申請したのですが、二年経って却下されました。その原稿が宙に浮いている状態です。中国の友人が「中国で先に印刷しましょうか」と述べてくれていますが、そうすると著作権は中